史林

第38巻　第3号　　史学・地理学・考古学

九州古墳墓の性格……樋口隆康（1）
江戸幕府元文の貨幣改鋳……伊東多三郎（24）
成化時代の伝奉官について……谷光隆（46）
資料紹介
軍人勅諭の成立と西周の憲法草案(三)……梅溪昇（61）
書評と紹介
杉浦明平：ルネッサンス文学の研究……永井三明（70）
末松保和：新羅史の諸問題……三品彰英（74）
H. Lautensach : Der Geographische Formenwandel. Studien zur Landschaftssystematik……矢守一彦（76）
E. Miller : The Abbey and Bishopric of Ely……富沢霊岸（80）
学界消息

史学研究会
京都大学文学部内

一九五五年四月二五日印刷
一九五五年五月一日発行

京都大學文學部東洋史研究室
東洋史研究會
振替口座京都三七二八番

④ 鳥居博士前掲書

⑤ 瀬之口伝九郎「九州南部に於ける地下式古墳に就いて」（考古学雑誌九の八　大正8）

⑥ 曾野寿彦、中川成夫、佐藤達夫「鹿児島県伊佐郡羽月村下殿古墳発掘調査報告」（考古学雑誌三六の二　昭和25）、寺師見国「鹿児島県伊佐郡焼山古墳」（日本考古学年報1　昭26）

⑦ 宮崎県報告第十一輯（昭和16）

結

以上南北にわけて九州の古墳墓を概観したが、全体を通じてみたとき、畿内的基盤の上に立ちながらも、北部九州においては、それに大陸的要素が加えられ、それと畿内的なものとの交渉のうちにこの地の個性が発現したと考えられる。しかしそれは決して畿内の優位性を否定するようなものではなかった。横穴式石室墳の華麗な発現も、それが南鮮と一体になって動いたための現象であって、北部九州の独自性にたつものではなかった。また三角縁神獣鏡のあり方に畿内と九州の間にみた相異も抜本的なものでないこと、既述のごとくであるとすれば、絶対数において畿内が多いことは、それを副葬した古墳築成の時期には、畿内が文化の中心をなしたという従来の考古学者の説を否定することはできない。それを藤間氏[1]のごとく、北九州に輸入された鏡が、畿内によって征服されると共に、略奪されて畿内に多くもち去られたとして、かえって邪馬台国北九州説の傍証にしておられるがごとき所論は、遺物資料の現象的理解という考古学的論究の本質を理解せられないものというほかはない。略奪によつて一国の文化要素を徹底的に運び去り得ないことは、ローマの強力をもってしても、ギリシヤの彫刻をギリシア本土から抹殺し得なかった一事実をあげるだけで納得されるであろう。したがって私見をもってすれば、邪馬台国所在論も、卑弥呼の時代を古墳文化期とする立場にたつかぎり、三世紀前半の古墳の確実な存在が証明し得ざる今日においては、いまだ断定の時期に達しないと云わざるを得ないであろう。

① 藤間生大『日本民族の形成』一八八頁

【お知らせ】 史学研究会の振替番号が京都五一五五番に変りましたので、会費御納入の際は御注意下さい。

㊺ 憲宗実録巻九九成化七年十二月庚午、大学士彭時等上言。

㊻ これよりさき成化十四年八月庚子、六科給事中海等の上言によれば、近ごろ光禄寺の買辦を増添し、大約一季に銭三—四百万文・鈔一—二百万貫を用いるようになつた、と云つている。（憲宗実録巻一八一参照。）。

㊼ 宮崎教授の示教による。

㊽ 明史巻七九食貨三倉庫参照。

㊾ 明史巻一四憲宗本紀「成化十七年二月壬戌。聚天下庫蔵出納之数。

㊿ 憲宗実録巻二三三成化十八年十月丙子「詔取太倉折粮銀四十万両。并各衙門去任官皂隷柴価銀三千四百四十余両。入承運庫供用。」

なお成化十六年正月には太倉の見貯銀が三十一万両に及ばなかつた（憲宗実録巻一九九成化十六年正月庚戌）。

(51) 明通鑑巻三五成化二十一年三月庚子。昭代典則巻二一成化二十一年九月。王鏊守溪筆記（紀録彙編巻一二四）。

(52) 「東洋史研究」第十三巻第三号誌上に発表した拙稿「成化時代における司礼監の地位」参照。

〔附記〕本稿成るに及んで佐伯助教授には特に繁務を割いて校閲の労を執られた。茲に記して深甚なる謝意を表する。

会報

史学研究会六月、七月例会及び大会の予定は次の通りです。御参会をお待ちしております。

一、六月例会

日時　六月四日(土)午後一時　場所　京都大学文学部第八教室

講師並に演題

惣庄制の歴史的意義　石田　善人氏

地方都市と農業　渡辺　久雄氏

楽浪郡時代における朝鮮土着文化　有光　教一氏

一、七月特別例会

日時　七月二日(土)午前十時　場所　京都大学文学部第一教室

講師並に演題

シンポジウム「時代区分及び地域区分の問題」

午前の部

日本史の時代区分　井ヶ田良治氏　前田　一良氏

考古学の時代区分　角田　文衛氏

午後の部

西洋史の時代区分　瀬原　義生氏　前川貞次郎氏

地理学の地域区分　藤岡謙二郎氏

東洋史の時代区分　池田　誠氏　内藤　戊申氏

（討論依頼）宮川　満氏（日本史）会田　雄次氏（西洋史）水津　一朗氏（地理学）里井彦七郎氏（東洋史）澄田　正一氏（考古学・交渉中）

一、秋季大会

昨年同様十一月一日（火）見学、二日（水）史学研究会大会及び総会、三日（祭）読史会、東洋史談話会、西洋史談話会、各大会を行う予定であります。

り、次第に強化してくる王の巡回裁判、州知事の権力により圧迫され、Isle of Ely を除いて、昔の様な judicial immunity の意義を失い、administrative immunity と化し果て、英国国家行政裁判組織の強化と共に、十三世紀のエリーの特権は国の大きな機構の一部とされ行き、征服王の原則、the friendly co-operation of William the Conqueror with his companions と云う大前提が前面に押出され、エリー僧正の特権も regnum の一部であると云う意識が次第に強くなつて来る。

最後の第八章 Administration では、当時の Angevin 王朝の強力な行政改革及び highfarming のための経済変動・社会変動に対するために、エリー領内の行政組織が立派な充実したものとなつて来る事を考察するが、その組織の頂点にある僧正の代理職 Seneschal は、元来僧正と王との連絡を務めつつ領内の行政を運営して行く者であつたが、十三世紀に入つて次第に Seneschal 職が専門化して来、同じ人物が王の Seneschal になつたり、僧正の Seneschal になつたりすると云う注目すべきクロノロジーを示す様になる。

即ち、此れは、十三世紀当時の行政組織の充実、専門化を示すものであると同時に、又 honour-feudal community が十三世紀の強力な Angevins の王政組織の中に入れられて行つた事を意味するものであり、斯くの如くして次第にその封建的機構が所謂 Angevin 王朝下の封建王政の組織下に編入されて行く様相が画き出されている。

×　　×　　×

以上、極めて雑然と無様に E. Miller の力作を紹介し、その価値を半減せしめた事を断らねばならぬが、本書は、可能な範囲内の原史料を駆使して極めて問題的に論述し、十三世紀迄の Isle of Ely の社会構造の動きを、Isle of Ely と云う局所に捉われる事なく巧みに分析した文字通りの力作であり、私達に多くの示唆を与えて止まないものがあると思う。

—富沢霊岸—

新入会員

荒井貢次郎
池田　温
磯崎　正彦
井上　義彦
今西　春秋
上野　照夫
小野　一成
笠松　宏至
加藤　一朗
工藤　利悦
後尾　克巳

鈴木　康範
田中　稔
鶴岡　静夫
豊沢　良行
中庄谷　直
福島大学附属図書館学芸学部分館　福島市浜田町八四
水野　祐
ミレー書房　京都市伏見区御香宮門前町
本村　豪章
柳田　節子
米沢　康

学界消息

昭和三十年度京都大学卒業論文題目

国史学専攻

石川啄木論　上田博信
独占資本主義段階における中小工業に関する一考察　江口圭一
自由民権思想と国権主義　河野欣也
幕末維新期における農村社会の動向　高沢裕一
日露戦争における反戦論　椿隆則
古代社会における在地の変質について　戸田芳実
幕末尾張藩の政治経済的考察　中村哲
諭吉における国権論　西山洸三
歌舞伎の演劇的確立への発展過程　藤井恒男
森有礼の限界について　安原隆文
寛政異学の禁の一考察　山田祐造

〔修士課程〕

宮津藩政改革の経済的基盤　池田敬正
近世初期に於ける日蓮宗不受不施派の成立とその禁圧に就いて　藤井学
伊勢神宮の基盤とその変質　藤本康彦
幕政改革の社会的基盤　脇田修

東洋史学専攻

同治中興期と初期の洋務運動　大戸道彦
孫文と中国ブルジョアジー　近藤秀樹
明清交替期の叛乱　寺田隆信
ベリンスキーの民族観についての一考察　荒武鉄郎
宗教改革の本質　川畑康郎
T・ルーズベルトの革新主義について　志邨晃佑
一八四八年のドイツ革命における農業問題　末川清
ギボンのローマ帝国衰亡史論　中村一子
ローマ時代のガリア社会に関する一考察　森下忠夫
古代メソポタミアに於ける主権観の基本的性格　山本茂

〔修士課程〕

トゥキュディデスのペロポンネソス戦争史観　藤縄謙三

人文地理学専攻

兵庫県の農業地域区分　井上一男
明治以後に於ける長岡市の発展形態　桜井庸也
篠川平野散村の起源　高辻幸一
地価の地理的考察——徳島市を例として——　高本正
古代四国の地誌的研究序説　服部昌之
富山県氷見市における漁業の一考察　氷見方治
地方都市群とその周辺について　山澄元
中国茶業の地理学的研究　横田実

〔修士課程〕

南米土着農耕文化の地理的研究　佐々木高明

考古学専攻

オリエントにおける王陵の成立過程について　小野山節

執筆者紹介

樋口隆康	京都大学講師
伊東多三郎	東京大学教授
谷光隆	三島野高校教諭
梅溪昇	大阪大学助教授
永井三明	京都大学大学院学生
三品彰英	同志社大学教授
矢守一彦	京都大学大学院特別研究生
富沢霊岸	島根大学講師

村山修一著
日本都市生活の源流
わが国都市の源流たる純粋封建制以前の京都について、都民殊に庶民階級を中心とした都市生活を社会経済及び思想文化の両面から、両者の有機的関連の下に考察したもの
A5 上製・二五〇円 一九〇頁
再版出来
A5 上製・三八〇円 三四四頁

新日本史概論
大学教養並に短大向テキスト・一般教養向に好適

京都・東山・馬町 関書院 振替京都26701

大学教養課程のテキストとして最適の概説書

魚澄惣五郎・福尾猛市郎・小倉豊文・後藤陽一編
教養日本史
価180円

杉本直治郎・浦廉一編
教養東洋史
価220円

千代田謙・瀧井鉄男・松浦道一編
教養西洋史
価200円

下村彦一・米倉二郎編
教養人文地理
価220円

各冊 A5判 150～190頁 横組 送料24円

京都市右京区川島北裏町74 柳原書店 振替京都7812番

編集後記

史林第三八巻第三号をお送りできる手順になつた。また力作をもつて本号を飾ることができたことを編集委員は大きな喜びとしている。

年六号の発刊――それはいかに送迎に余念のない日月であろうか。つい最近号を送つたと思ういとまもなく次号の校正が回つてくる――それが少なくとも実感であるように思われる。そして編集委員として心すべきは、この機械的な送迎業務に追われて、おちいらんとも限らないマンネリズムなのだ。もちろん、われわれとしては十二分にこれを警戒はしている。だが、読者諸兄姉の忌憚ない御批判、それこそ、われわれの怠慢をせめ、より以上の努力に油を注ぐものであることを信じ、あらためてお願いしなければならないことである。われわれは本誌所載の諸論文が、それぞれ学界において反響を呼び、また呼ぶであろうことを信じるものであるが、同時に編集内容なり、編集事務なりについても、御意見を寄せられんことを願つてやまない。ウツロなるものへの打擲、それも考えようによつては意味あることであるが、われわれの打撃が、相応の反響と手応えとでもつて迎えられんことを。それについても、定期的に行われる史林合評会への積極的な御参加をお願いしたい。

（越智）

一九五五年四月二五日印刷
一九五五年五月一日発行
定価百円
史林（第三八巻 第三号）
京都市左京区吉田本町 京都大学文学部内
発行所 史学研究会 振替京都五一五五番
理事長 原隨園
編輯主任 赤松俊秀
京都市下京区七条御所ノ内東町三九
印刷所 中村印刷株式会社

THE SHIRIN

or the

JOURNAL OF HISTORY

Vol. XXXVIII, NO. 3 May. 1955

CONTENTS

Articles:

Some Features of the Tumuli in Kyushu (九州) ..... *T. Higuchi* (1)

The Debasement of Currency by the Edo (江戸) Government at the Genbun (元文) Period..... *T. Ito* (24)

Ch'uan féng kuan (伝奉官) of the Ch'eng hua (成化) Period..... *M. Tani* (46)

Short Notice:

Imperial Edict for the Soldiers and the Draft of Constitution by Amane Nishi (西周) (3)... *N. Umetani* (61)

Book Reviews & News

Published

by

THE SHIGAKU KENKYUKAI

(*The Society of Historical Research*)

Kyoto University, Kyoto, Japan